

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00731

研究課題名（和文）アカデミック・ライティングにおける適切な間接引用指導のための調査・研究

研究課題名（英文）Survey and research on indirect citation instruction in academic writing

研究代表者

向井 留実子（Mukai, Rumiko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：90309716

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：大学のアカデミック・ライティングにおいて適切な引用指導を行うには、従来の形式的な説明（引用方法・引用表現・出典提示方法）にとどまらず、引用が文章中で機能する形、すなわち「引用形態」での指導が必要であることを実証的に示した。そして、「引用形態」と文章の書き方の関係を明らかにするため、学術分野や研究方法の違いによる書き方の特徴を探った。その結果一次資料の分析をする人文系分野では語り調の書き方が用いられ、「引用形態」の選択では他の分野と異なる特徴が見られることが明らかになった。また、大学におけるライティング指導で課題となっている初年次から専門への接続のために、引用指導も段階的に行うべきことも示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、引用指導を書き方指導につなげるため、引用を含む文の形を「引用形態」という用語を用いて、引用方法・引用表現・出典提示方法等を包括する視点を示した。また、研究が進んでいなかった学術分野・研究方法によって異なる文章の書き方や引用表現の使い方などについて、具体的な違いを明らかにすることができた。そのうち、文学分野の語り調の書き方、そこで用いられる「引用形態」の特徴を示したことで、学術論文を構造からの分析だけでなく、書き方の側面から分析する必要性も示すことができた。これらの成果は、アカデミック・ライティングにおける引用指導の位置付けを明確にし、効果的な指導法を進めるのに貢献すると思われる。

研究成果の概要（英文）：We demonstrated that to provide appropriate citation instruction for academic writing, it is necessary to go beyond the traditional explanations (citation method, citation expression, and source presentation method) and view citations in the form in which they function in the text, i.e., in "citation form". To clarify the relationship between "citation form" and writing style, we explored the characteristics of writing styles in different academic fields and research methods. As a result, it became clear that the narrative style of writing citations is used when analyzing materials in the humanities and that the choice of "citation form" shows characteristics that differ according to the field. This study also indicated that citation instruction, an issue in writing instruction at universities, should be conducted in stages from the first year as students move into their major fields of study.

研究分野：日本語教育

キーワード：アカデミック・ライティング 間接引用 分野による違い 引用指導 引用形態 初年次から専門への接続 語り調 解釈

1. 研究開始当初の背景

大学におけるアカデミック・ライティング指導において引用は必ず取り上げられる重要な項目であるが、剽窃や盗用につながる引用使用が多いという実態があり、適切な引用使用を導くための指導法の開発が求められていた。

一方、研究当初の段階では、引用研究は、話し言葉を対象とした文法研究や第二言語習得研究での知見は蓄積されていたが、書き言葉、特に学術的な文章についての引用研究はまだ緒に就いたばかりであった。先行研究には、特定分野の学術論文における引用表現の特徴を分析する論考、引用・解釈表現と文章構造との関係を明らかにする論考、引用を行う際の学習者の困難点を、学習者の意識や誤用例から明らかにする論考など見られたが、数も少なく、その結果を大学のアカデミック・ライティング全体に位置付けて、引用指導の提案をするまでには至っていなかった。

そこで、本研究グループでは、先行研究および本研究グループの行った調査結果を踏まえ、引用指導を有効なものにするには、引用を文章の局所的な操作として捉えるのではなく、文章展開・構成と密接に関係する統合的な操作と捉える必要があることを指摘していた。本研究はこの前提を踏まえて行ったものである。

2. 研究の目的

本研究の目指すところは、学術的文章での引用の用い方の実態と引用指導の実態を照らし合わせ、指導の課題を明らかにして、より有効に機能する引用指導のあり方を提案することである。また、その提案を現場で実質的に使えるものにするために、アカデミック・ライティング指導全体における引用指導の位置付けを明確にすることも目指した。

なお、本研究では、引用使用の実態の分析にあたって、実際の文章で用いられた引用を含む文を「引用形態」と呼んでいる。これまでの引用研究やライティングの教本の多くは、引用方法、引用表現、引用記号、出典提示方法等、個々の要素に注目しており、それらを文レベルで包括的に捉える視点はなかった。しかし、文章での引用の用い方を探るには、まず、文の形に注目する必要がある。そこで、本研究では、引用を含む文を包括的に捉えるために「引用形態」という用語を考案した。

3. 研究の方法

(1) 学術論文のコーパス作成と分析

「引用形態」の選択は学術分野によって異なることが明らかになっていたため、人文社会系 12 分野全 60 論文のコーパスを作成し、分野ごとの引用の使用実態調査を行った。

(2) アカデミック・ライティングの教本の分析

(1)と対照させるため、指導現場で用いられるアカデミック・ライティングの教本 11 冊の引用の扱いについても調査を行った。

(3) 日本人学生および留学生に対する調査

引用を行う前提となる読解力、要約力、論理性の理解の実態、また、「引用形態」の理解の実態を明らかにするため、日本人と留学生を対象として半構造化インタビュー等の調査を行った。

(4) 学術分野の異なる研究者に対する調査

「引用形態」選択の分野別特徴と、大学のライティング教育全体から見た引用指導の位置付けを明らかにするため、人文社会系分野の研究者で初年次・初学者へのライティング指導も行っている教員に対する半構造化インタビュー調査を行った。

4. 研究成果

(1) 引用を行うための読解力・要約力・論理性の理解の実態

引用の前提となる能力として、引用元の文章を正しく読解し、それを適切に要約して、自らの文章に取り込んでいくための論理性が理解できる力が必要となる。本研究では、文化背景の異なる 3 名の留学生に対し、文章タイプの異なる文章(エッセイと論文)を用いた調査を行った。具体的には、2 つの文章の読解過程を発話思考法で観察してから、それらの要約文を作成させ、インタビューを行った。その結果、読解では、文章のタイプの別なく、L1 での方略や L2 で学んだ方略が用いられていたが、要約では、L1 の文化的背景に影響を受けた方略が用いられていた。それを踏まえ、L2 学習では、文章タイプによる読み方の違いへの意識化や、要約トレーニングが必要となることを指摘した。

(2) 引用の捉え方の課題と本研究の提案

アカデミック・ライティングの初学者向け教本と専門分野に特化した教本を対象とした調査により、引用の捉え方や呼称が個々に異なっていることが明らかになった。具体的には、「引用」

という用語自体を用いないもの、直接引用のみを引用とするもの、直接引用とそれ以外の引用の対立で示しているものなどがあり、直接引用以外の引用の呼称も、間接引用、要約、パラフレーズとさまざま見られた。また、直接引用以外の引用を紹介している教本の多くは、引用表現を用いて原文を言い換える引用の紹介のみで、引用表現なく出典のみ示して引用元の内容をまとめている引用は取り上げられていないなど、包括的な紹介になっていないことが明らかになった。

そこで、本研究では、引用方法を、言い換えのない直接引用、引用表現を用いて原文を言い換える間接引用、出典のみ示し引用表現のない参考引用の3つに分類し、引用を「引用形態」で捉えることを提案した。

(3) 学習者の引用理解の課題の解明

学生が、引用の、直接引用、間接引用、参考引用という3つのタイプを認知しているか明らかにする調査を行った。その結果、教本等で紹介される典型的な形態をした直接引用・間接引用については認知されるが、教本では扱われていない参考引用、直接引用と間接引用が混在する場合、語り調の書き方の中の間接引用などが認知されにくい傾向があることが明らかになった。この結果から、引用指導が特定の「引用形態」しか扱っていないために、学生の引用理解を困難にしている可能性が示唆された。

(4) 学術論文における引用表現の使用実態

引用をする際に用いられる「～によると」「～によれば」「～ように」の使用環境や使用傾向について、次のことを明らかにした。

情報源を示す「～によると」と「～によれば」については、教本等では区別なく紹介されるが、「～によると」は情報源が公的資料・辞書などで、後節の引用内容が定義や数値の場合に用いられ、「～によれば」は情報源が人物名や個人記録などで、後節の引用内容が情報源から得た考えや知見の場合に多く用いられる傾向があった。また、両表現は基本的に、情報源とそこからの引用内容を示す表現として用いられるが、その表現が出現する前に情報源への言及がある場合は、両表現とも情報源が筆者の判断の根拠となり、後節の内容は筆者の解釈・判断となる傾向があった。「～ように」は、主張の正当性を補強するために引用元の情報を示す表現で、引用元の内容の配置によってさまざまなパターンがあり、それぞれの論理構造が異なっていた。

以上の結果を受け、指導への提案も行った。

(5) 分野による「引用形態」選択の違い

学術論文調査では、社会学系の論文を中心に、「引用形態」の選択傾向を探った。その結果、教本等で紹介される典型的な「引用形態」が用いられることは少なく、参考引用が多く用いられていることが明らかになった。

また、インタビュー調査では、調査報告型の日本語教育学の論文を執筆する研究者3名と資料分析型の文学の論文を執筆する研究者3名の「引用形態」選択の意識を探った。その結果、文学の場合は日本語教育学と異なり、過去の文献などの一次資料と先行研究などの二次資料の両方から引用をする必要があるため、それらが区別できるような「引用形態」の選択を行っていた。また、文学における語り調の書き方が「引用形態」にも影響していることが確認された。

(6) 大学のアカデミック・ライティング全体に有機的につながる引用指導

アカデミック・ライティングの初学者向けの教本と専門分野に特化した教本調査から、前者では直接引用が重視されており、後者では間接引用が重視されていることが明らかになり、初学者から専門段階へのつながりに課題があることが示唆された。

大学のアカデミック・ライティング指導の中で引用指導がどう位置づけられるかを探るため、専門分野の異なる研究者6名に対するインタビュー調査や、アカデミック・ライティングの専門家3名を招いた座談会を行った。その結果、アカデミック・ライティング指導において、初年次で学んだことがその後の学習で生かされていないことが課題になっており、引用指導も同様の問題があることが明らかになった。初学者が専門段階で使える知識・スキルにするためには、引用指導を、大学のアカデミック・ライティング指導に関連づけつつ、段階的に行っていく必要があることが確認された。

以上の成果は、JSPS 科研費 JP23K00625「アカデミック・ライティング指導のための引用文の形態分類と機能解明を目指す調査研究」に引き継がれ、研究が進められている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 向井留実子・中村かおり・近藤裕子	4. 巻 13
2. 論文標題 レポート・論文作成のための引用指導の課題－初年次生と大学院生に対する 引用箇所判断の調査から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 121-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村かおり・近藤裕子・向井留実子	4. 巻 25
2. 論文標題 文章理解過程と要約文に見られる学習者の文化的背景と読解方略の影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育 2021日本語教育シンポジウム 第24回AJEヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集	6. 最初と最後の頁 579-583
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 近藤裕子・中村かおり・向井留実子
2. 発表標題 アカデミック・ライティング初学者に向けた引用指導の課題
3. 学会等名 豪州日本研究学会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 近藤裕子
2. 発表標題 初年次ライティング教育のゴールとアプローチ
3. 学会等名 初年次教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村かおり・向井留実子・近藤裕子
2. 発表標題 学術的文章における引用形態の使い分けに関する調査報告 文学を専門とする研究者へのインタビュー結果から
3. 学会等名 専門日本語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 向井留実子・中村かおり・近藤裕子
2. 発表標題 学術論文における「~によると」「~によれば」の使用環境
3. 学会等名 日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村かおり・向井留実子・近藤裕子
2. 発表標題 書き手の意図から見た引用形態の使い分け
3. 学会等名 東アジア日本語教育・日本文化研究学会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 向井留実子・中村かおり・近藤裕子
2. 発表標題 文章作成のための引用指導における引用文の捉え方についての一考察
3. 学会等名 日本語 / 日本語教育研究会 第14回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 向井留実子、中村かおり、近藤裕子
2. 発表標題 学術論文における引用表現としての「ように」の使用環境
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤裕子、中村かおり、向井留実子
2. 発表標題 初年次ライティング教育から専門教育への接続の課題
3. 学会等名 第28大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村かおり、近藤裕子、向井留実子
2. 発表標題 文章理解過程と要約文に見られる学習者の文化的背景と読解方略の影響
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向井留実子、中村かおり、近藤裕子
2. 発表標題 学術的文章の非典型的引用をめぐる一考察
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向井留実子、中村かおり、近藤裕子
2. 発表標題 社会学系の学術論文に見られる引用形態とその傾向
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向井留実子・中村かおり・近藤裕子
2. 発表標題 学術的文章の非典型的引用をめぐる一考察
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤裕子・中村かおり・向井留実子
2. 発表標題 初年次の日本人学生が引用箇所を判断する際の困難点
3. 学会等名 大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村かおり・向井留実子・近藤裕子
2. 発表標題 文章理解過程と要約文に見られる学習者の文化的背景と読解方略の影響
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向井留実子・中村かおり・近藤裕子
2. 発表標題 留学生は学術的文章の引用箇所をどのように判断しているか
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村かおり・向井留実子・近藤裕子
2. 発表標題 読解学習を論理的な文章作成につなぐための一考察
3. 学会等名 第54回日本語教育方法研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 近藤裕子・中村かおり・向井留実子
2. 発表標題 発話思考法による大学生の読解過程に関する調査
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村かおり・向井留実子・近藤裕子
2. 発表標題 読解力の高い日本語学習者はエッセイの論理性をどのように再構築するか
3. 学会等名 第53回日本語教育方法研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	近藤 裕子 (Kondo Hiroko) (70734507)	山梨学院大学・学習・教育開発センター・准教授 (33402)	
研究 分担者	中村 かわり (Nakamura Kaori) (70774090)	拓殖大学・外国語学部・教授 (32638)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------